

FEMME POLITIQUE

ファム・ポリテイク NO.69 CONTENTS

「国」を思う心……岡野守也 2

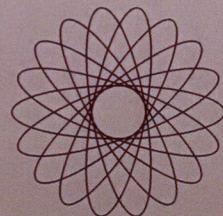
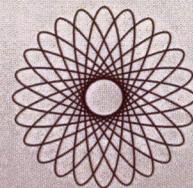
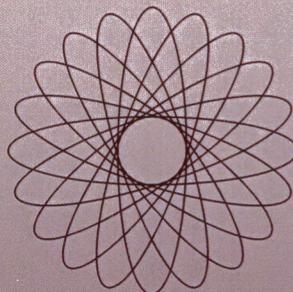
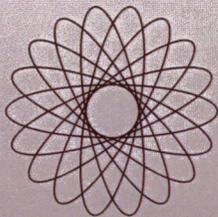
民主党がいまやるべきこと……円より子 4

制約経済の時代を生き抜くために……青木秀和 6

おとなしい日本の若者とたくましい英国の若者と……優子 山形フットマン 8

原子力発電所の真実……山口遼子 13

日本に永く住む韓国人のわたし……金吉宰 16



ファム・ポリテイク編集部

(株)グループわいふ 〒162-0062 東京都新宿区市谷加賀町2-5-26 tel 03-3260-4771 fax 03-3260-4773

「国」を思う心

岡野守也

『ファム・ポリテイク』のような雑誌に、しかも編集部から「国」を思う心」というタイトルをいただいで書くなど、少し前には想像できなかったことです。時代が変わりつつある、変わるほかないことへの気づきが広がりつつある現われなのでしょう。

一九四五年八月十五日、大日本帝国は敗戦し、国を愛し信じ献身的に戦った日本人ほど心に深い傷を負ったと思われ

本です。思い出したくないことを思い出すことが必須なのです。

したという記憶を思い出すことは、私たちの受けた教育では、完璧にタブーでした。「国」

「危ないぞっ！」と反応されたことがありました。なんと彼自身、日本思想史の研究者だったのですが。

して関心を持つとしたらいつも否定的でなければなりません。先例のように、ちょっとしたそういう話になると、条件反射的に「アレレギー反応」をしてきたのではないのでしょうか。

れまず（初めから愛さず信じてできるだけ献身を避けようとした人なら傷は浅かったかもしれない）が。大きな

しかし、戦争を体験した世代の日本人は全体の傾向としては敗戦前後の心理的な事実と記憶を忘れようとする、つまり実は抑圧することによって、心理的に処理しようとしてきたように見えます。そして、私のような戦後世代（昭和二十二年生まれ）は、すでに抑圧を大前提とした戦後教育を受けて育ち、抑圧が抑圧であることを意識化する手ばかりをほとんど持たないまま、かなりの年齢まで過ごしてきました。

でも言おうものなら、進歩的な先生や先輩に「危ない！それは天皇制ファシズムだ！」と叱られたものです。頭から否定し無視すること、つまり抑圧が正義に見えていたのです。

その状況はずっと続いており、私が仏教を学び、その普遍的で現代的な意味がわかるようになり、その関連で日本に仏教を導入した責任者としての聖徳太子に興味を持ち始めた十年あまり前、知人である同世代の研究者に久しぶりに会った時、「最近どんなことをしてる？」と聞かれて、「聖徳太子に興味があつてね」といった途端、間髪を入れず、

知識人にとっては、「国」「国家」「愛国心」について関心をもつこと、考えること、まして多少でも肯定的に論じることは、完璧なタブーでした。国を愛し信じて裏切られたので、その記憶を抑圧し、もう二度と愛し信じてはならないという禁忌を深く深く信じたのです。その禁忌と対応し、それを補強したのが、マルクス・レーニン主義的な国家観——国家は人民を収奪するための暴力装置にすぎない——でした。

心的外傷は、原因になった出来事がありにもつらいので無意識へと抑圧するために起こっているものであり、治療のためにはどんなにつらくてもまず意識化することが必要だ、というのが精神分析の基

民が本気で国を愛し信じ献身

「国家」の体制こそ、経済・

今、世界には統一された人類国家・世界国家は存在しておらず、日本もまた「日本」という名前の「国家」なのです。しかも、その日本という「国家」の体制こそ、経済・

「国家」の体制こそ、経済・

財政、福祉、教育、医療、環境……等の国民全体に関わる問題について最終決定権（権限・権力）をもった中枢機関なのです。それは、事実として単なる「暴力装置」ではありません。

ですから、現代の世界の中で、「世の中をよくしよう」「社会をよくしよう」と言った場合、まず直接手の届く・手をつけるべき「世の中・社会」の核は「国・国家」だったのです。そしてだからこそ、戦後六十五年、多くの進歩的知識人がやってきたように、反体制側でどれほど体制を批判しても、「国・国家」はよくならず「世の中」もよくならなかったのです。

もし、私たちが世の中をよくしたいのなら、まず自分の国をよくすること、しかも国家体制の側に立って国家体制をよりよくすることを考える必要があると思われれます。よくなった国家によって、本格的で適切な国際貢献をすることによってのみ、より広い意味での「世の中」である人類社会もよくする可能性が出てくるでしょう。

今、本当に「世の中をよくしたい」と願う人間にとって

取るべき姿勢は、「反体制」でも「脱体制」でもなく、観念的な「世界市民（コスモポリタン）」になることでもなく、まず「自分の国の体制」をよりよくしようとすることではないでしょうか。

そして、国を担いよくするには、まず「国を思う心」というより端的に「国を愛する心」「愛国心」が必要です。愛していないもののために、情熱的に努力することはできないからです。熱い思いをもって献身的に努力する人間なしに、国がよくなることはありえません。

愛国心こそ、国をよくするための原動力です。ですから、私たち日本人は、今、長い間罹っていた「国家・愛国心アレルギー」から回復する必要があります。とはいっても、もちろん東アジア世界への「侵略」という面のあった——それがすべてではないと主張する学者も多く、かつ妥当な点もあると考えられますが、詳しく述べた頁数はありません——戦前の「大日本帝国」を、そのまま一度愛することは無理でしょう。

では、どういう「日本」な

ら愛することができるのでしようか。私は、日本がようやく「国のかたち」を創り始めた飛鳥の時代、聖徳太子が掲げたとされる「十七条憲法」の「平和と調和の国日本」という国家理想にこそ、愛することのできる原点としての日本の姿がある、と考えています。そして、飛鳥以来千四百年あまりの日本の歴史は、「和の国日本」という国家理想の実現に向けての意識的・無意識的な紆余曲折と苦闘の歴史として読み直すことができます。はずだ、と思っ

ているのです（「昭和」、「大東亜共栄圏」、「戦艦「大和」でさえ、あまりにも曲解された、しかし「和」への模索の表現だったのではないでしようか）。

まだそれを実現できてはいないが、しかし長い紆余曲折にもかかわらず決して高い理想を失うことはなかった国・日本ならば、私たちは熱い思いをもつてもう一度愛することができるとは思えないでしょうか。私たちは、そこにこそ、近代における大失敗・大きな曲折にもかかわらず、それでもなお愛し続けることのできる、愛し続けなければならぬ、「我が祖国・日本」の姿

を見ることができるとはいか、と思うのです。

多くの国民にそういう熱い愛国心が湧き上がってきた時にのみ、日本は変わる、変えることができる、それは、もはや右か左かという議論を超えている、と私は考えています。

* *

詳細は、拙著『聖徳太子「十七条憲法」を読む——日本の理想』（大法輪閣）、サンクラハ教育・心理研究所会報『サンクラハ』に連載中の『「十七条憲法」と緑の福祉国家』、研究所のHP (<http://www.smgrh.gr.jp>)、筆者のブログ「伝えたい！いのちの意味」(<http://blog.google.jp/smgrh1992/>)の当該記事などをご参照ください。（おかのもりや サンクラハ教育・心理研究所主幹）

民主党がうまくやれるくらい

円より子

この原稿を書いている今日、円が15年2カ月ぶりに1ドル＝83円台となり、日経平均株価は9000円の

はた「ただの人」になっているので、TVのニュースや新聞週刊誌を見ている限り、私の目にも民主党が、この国の難題に真剣に向き合っているようには見えない。

なに訂正しても説明しても「参院選が終わるとすぐ上げるんでしょ」としか受けとられなかった。

で実行できない」「軽々に言い過ぎる」という体質への不信感で充ち満ちていた。

子どもの数は、丙午の年より下回り、1・57ショックが列島中を駆けめぐった。

の経済と雇用は回復の兆しが見えない中、輸出に活路を見いだそうとするアメリカがドル安政策をとっているので円高は避けられないのだが、菅政権の無策と代表戦の抗争が円高株安を招いているという人さえいる。

「民主党はなぜあんなに参院選で大敗したのか、政権をとって短期間だけけど、実現できたことがずいぶんあるじゃない、円さんそれを書いてよ」との田中編集長からの

「子ども手当でより現物支給のほうを望む」人のほうが多いとの世論調査があった

た今年の改選組の議員から「しっかり実現したことをアピールすべきだ」との意見が出て、今、それは党のホームページで見ることができ

る。このことが、昨年の政権交代がおきた大きな要因だった。人々は無策の自民党に愛想が付き、民主党に賭けたのだ。

「そんな、代表戦のことだけにまかせているわけじゃない。来年の予算のこと、脱デフレ政策等々について必至で毎日議論している」と私の元同僚議員たちは言う。

その最たるものは菅さんの消費税発言だった。「4年間上げないと言ってたのに」と多くの人に抗議された。

「子ども手当でより現物支給のほうを望む」人のほうが多いとの世論調査があった

崩壊、日本では株の時価総額が910兆円のピークに達し、一人の女性が生涯に生む

ももちろん経済の低迷は困る。しかし菅さんの主張する「強い経済、強い財政、強い社会保障」に私はそれを掲げて闘う民主党の候補者でありながら違和感をもった。

そう、私は7月25日まで民主党の参議院議員だった。7月11日の第22回参院選挙でまさかの敗北を喫し、今

野党の自民党が10%の消費税上げを言うのと違い、現職の総理の言は、どん

菅天間のこともそうだ。総理や閣僚の発言が民主党の全てととらえられ、「言うだけ

崩壊、日本では株の時価総額が910兆円のピークに達し、一人の女性が生涯に生む

め、中国に抜かれるかと言わ

れながらもまだGDP世界二位の国である。しかし、ドル

ベースでの一人当たりGDPをたとえば人口規模の大きい

先進国アメリカ、ドイツ、フランス、イギリスと比べると、

1990年一人当たりGDPが25万ドルで、五カ国中一位

だった日本は1995年は42万ドルと圧倒的トップと

なった(二位のドイツ3.1万ドル、5位のイギリス2.0万ドル)。

ところが直近の2008年では3.8万ドルに

下降し、アメリカ(4.7万)、フランス(4.5万)、ドイツ(4.5万)、イギリス(4.3万)に抜かれて最下位

になっている。

つまり、一人一人の国民の生活の豊かさは低下し、自殺・失業・貧困者が増え、自分は

幸せだと思う人が減っているのが現状だ。

とすれば、民主党のやるべきことは、国民一人一人が幸福

だと思える社会を築くことであって、規制緩和や新しい

公共で元気な経済を復活させる、安心できる社会保障のため

に堅実な財政を再建することではないか、実はそう考えて

民主党は予算配分を抜本的に見直し、「コンクリートか

ら人へ」を実現したいと努力してきたのだ。

しかし、残念なことに、特別会計を含めた抜本的な予算

の組み替えには激しい抵抗が予想され、これをし遂げるに

は強力なリーダーシップが必要だ。ところが、野党として

の攻撃力はあったものの、悲しいかな民主党政権は「政治

主導」と言いながら統治能力のなき、つまり大きな組織を

しきったことのない未熟さを露呈し、政治と金の問題もあ

いまって、国民の失望を買ってしまった。

それでも、私は民主党がやろうとしている方向性やヴィ

ジョンは間違っていないと思っ

ている。

この8月23日、私は炎天下の千鳥ヶ淵の戦没者追悼墓

園にいた。65年前、8月15日に終戦を迎えたのに、

スターリンが秘密指令を発し、満州にいた日本兵を日本

に帰すとあざむいて零下40度の極寒のシベリアに強制連

行した。彼の地で強制労働をさせられた60万の人々は

差別されてきたのだ。平均年齢87歳になったその人々に

ようやくその労苦にむくいて特別保証金を出し、シベリア

の地に埋もれたままの遺骨の収集を進め、シベリア抑留と

は一体なんだったのかを検証し、二度と理不尽な戦争や強

制連行をおこなないためにも次世代に語りつぐための法案

を通常国会終盤ぎりぎり「シベリア議連」の会長として

成立させたことを報告したのだ。

自民党政権が旅行券や感謝状でお茶を濁してきたこと

を、ようやく自民党政権がシベリア抑留問題にひとつの区

切りをつけたのである。しかし、この法案では韓国籍等の

外国人は除外されてしまった。

8月10日、菅総理は日韓併合100年の記念に談話を

発表したが、私はもう一歩踏み込んでシベリア抑留された

当時、日本国籍を強制され創氏改名させられていた韓国の

人たちにもこの法案適用をするぐらいの勇断をしてほしか

ったと思う。中国、韓国、アジアとの連携強化や核兵器

な責任を果たし、信頼される国になることと、国民一人一

人の雇用と社会保障を安心堅実にし幸福を感じられる政治

をすること、これは民主党が早急に打ち出すべきことであ

り、人々の信頼を得る道である。

そして大事な事は支持率に感わされないことである。

消費税について突然言及し、大敗の原因をつくりなが

ら、選挙が終わると引っ込め

てしまうなど、落選した私から見ると恨みがましくとられ

るかもしれないが、それなら選挙前に出すなよといいたく

なる。将来の子どもにツケをまわさないので大切なことだ

し、年金などのために消費税アップは必要だと考えて持ち

出したのなら、たとえ参院選で大敗しても引っ込めたりせ

ず、信念を持って議論を始めればいいのだ。党内で全く議

論せず突然言い出して大敗したら引っ込める、これが総理

のやることかと思う。それは国家戦略局についても同じである。選挙後、これも突然、

総理自身のアドバイザ的存在に格下げすると言ひ出し、

げするという。こういう、回りの意見、特に世論調査やマスコミに左右

され、自分の意見をくるくるかえることが国民の信を失う

のである。民主党というのは、マスコミの目しか気にしてい

ないポピュリズム政治をやっていると思われても仕方がな

い。小沢さんの顔ばかりみて国民をみていないとずいぶん

批判されたが、実は小沢さんを批判しているマスコミの動

向を常に見ているのが、TVによく出ている議員や閣僚の

多くの性癖だったのである。民主党はもっと自分たちの

やるべきことに自信を持つこと、そしてパッシングに強く

なり、リスクをとり責任をとる政党に脱皮しなければ、強

い野党がなくとも自滅する運命をたどるに違いない。

2012年、今よりさらに世界の経済が悪化していると言

われるが、そうした厳しい状況のなかで我が国の人々が塗

炭の苦しみを味わわないですむよう、しっかりセーフティ

ネットを張って元気な社会にするための民主党には脱皮を

してほしい。それが私の今の思いだ。(まどかよりこ・前民主党議員)

制約経済の時代を 生き抜くために

青木秀和

世の中、不況である。この

不況から抜け出すために何とかしると、マスコミ世論と野党勢力は政府の「成長戦略」のなさを指弾し、与党・政府も経済成長が達成されなければ「財政再建」も果たせず、「福祉国家」も実現できないことを認めている。

要するに右肩上がりの成長軌道を取り戻すことが、すべてを「解決」するための前提条件となるが、共通理解となっていないのである。

しかし、ここには、わが国のような発展途上国においてなお「経済成長」をひたすら求め続けなければならないのだろうか？という根源的な問いはない。

経済成長は財政赤字を解消しない

結論から先にいってしまおう。

わが国のように公的債務の累積が国内総生産の軽く2倍に及ぼうとするレベルに達したところでは、ギリシャのように公債への信認が低下して起る「悪い」金利上昇も、

景気が回復して資金需要が活発になって惹起される「良い」金利上昇も、財政にとっての不倶戴天の敵「金利上昇」には変わりはなく、それは財政の「さらなる」悪化をもたらすしかない。

したがって「経済成長で借金返済」と単純にいけるのは、「みんなの党」も「自民党」も「民主党」もその他大勢もインチキ以外の何ものでもない。

い。

財務省としても（もちろん

政府全体としても）、このところはよく分かっている、本音では景気回復を望んでいないはずだ。とはいえ、現在の財政運営では赤字国債の大量発行は避けられない。できるだけ低利で引き受けてもらえる発行環境を維持したいというのも本音だろう。

そこに暗雲が垂れ込めてくる。これまで国債を大量に引き受けている「年金」は、2・5%の金利を金利収入がないとやっていけない制度設計になっている。いまのような低金利（10年ものの国債で約1%）では、じつはこちらの財政が保たないのである。運用収益の不足分は積立金本体を取り崩して補うしかない。そうすると年金財政はも

はや公債の「新規引受」はおろか既発債の「借換」にも応じられなくなってしまう。それが引き金となって公債の引受市場は一気にタイトとなって、そこで起るのが「悪い」金利上昇である。

一九四七年生まれの団塊世代第一期生が六五歳となって基礎年金側に傾れ込んでくるのが二〇一二年。

そのあたりが大きな節目となるであろう。

消費税増税は悪夢以外の何者でもない

今回の総選挙では、法人税の税率を下げ、消費税の税率を上げるといふ方針が与党からかなり明確に打ち出された。もっともこれが民主党の大きな「敗因」となったのだが、多くの経済学者やエコノミストも、どうもこの方針への賛成派が多いようである。

しかし、まともにこんなことをやられたら零細自治体ほど税収は激減のうえ、歳出の実質額が急縮して、その地域の景気は奈落の底に真っ逆さまということになるのではないか。

自治体の法人関連の税金

は、外形標準でかかる事業所税を除いて、課税標準が法人所得、大ざっぱにいえば税制上の「粗利」におかれている。いっぽうで、日本の法人には様々な租税特別措置が認められていて、合法的租税回避が横行しているわけである。業界団体は、この「租特」の獲得を目論んで政府与党に「票とカネ」を渡して彼らと仲良くしてきた。

こうした「租特」があるうがなかるうが、地場の零細事業者の粗利なんてものほもともと高が知れていて、それが「減税」になってしまったら、法人関連の自治体税収は雀の涙にもならなくなるだろう。

しかも企業を「元気にする」と称して法人税をまけてみても、設備投資や雇用増につながるわけではない。

儲かっている企業は多かれ少なかれ「機関投資家」として金融市場に参加しているのだから減税分はその軍資金に消えるか、よくて世界的にみてダントツに高い株主配当性向を援護射撃するだけに終わるだろう。

では、法人税減税を補って余りある消費税増税がなされるとどうなるか？ 直ちに実

入りが増えることになるのか？どっこいそうは問屋が卸さない。

消費税に限っていえば、国も自治体も「最終消費者」である。企業のように「仕入れ税額」を他に転嫁できない。

消費税の増税が支出を直撃するというのがまったく計算されていないのである。

要するに5%↓10%に税率が上がったら、その上がった5%分はまるまる「持ち出し」になるのである。これは人件費や児童手当など移転支出を除く公共事業、公共調達の一部に及ぶ。

しかし、たいいていの財政では予算は「内税」の税込み金額で弾かれてはらずで、予算規模を据え置くなら、執行で調整するしかない。つまり税抜き「本体価格」を5%切り詰めなければならなくなる。

役所の出入り業者にとって、実質収入が5%ダウンするということの意味するところが反面、仕入れは確実に5%上がっているわけで、ダブルパンチで約10%の負担増となる。

財政支出に依存するウェイトが高い地域経済でこんな事態が起こったら、もう詳しく

説明するまでもないであろう。あるのは地域丸ごとの大崩壊のみである。

「金融制約」が意識された現代社会

世界最大の経常黒字を溜め込んでいるわが国は、世界的な国際収支をバランスさせるためには、本来なら累積黒字を解消する程度に「内需」を外国に向けて解放せざるを得ない立場にある。その国が「成長戦略」を採用して他国からさらなる収入の獲得に動いたら、世界経済の攪乱要因になるしかない。

最近1400兆円にも及ぶ個人金融資産を「動かせ」と提唱する声をよく耳にする。

しかし金融資産というものはお金が動いた結果であって、じつは金融資産の裏側には同額の「負債」がびっしり貼りついていることを忘れてはならない。これまでの経済学は債権者の理屈で経済現象を説明してきたのだから無理もないかもしれないが、一般に負債の存在が見えにくくなっている。

しかし、金融資産を「資産」とらしめるのは、かかって負

債の返済可能性である。負債が返済されることに信頼をおくのが「信用経済」を成り立たせるうえでの基本中の基本であり、返されない借金なんているのは贈与したのと同じではないか。

そもそも米国における債券化金融バブルの崩壊と、ギリシャが端緒を切ったソブリン・リスクの浮上も、この負債の返済可能性に疑問符がついたところが出発点である。

現代において「経済成長」を遂げようとするとするならば、2005年までの米国のように、政府が企業家計か、あるいはその全部が借金しまくって（これを金持ち用語では「レバレッジ」を利かすという）大散財するのを期待するしかない。

しかしもしそのような経済事態となれば、それは次のステージでより巨大な規模での債務不履行を準備してしま

要するに金融主導の資本主義は無限大に拡大可能ではなく、負債の重圧という「金融制約」がどこかでかかるのが必然なのである。

そのことがかなりはっきり認識せざるを得なくなりだし

たのが現在の世界経済情勢ではないか。

三つの「制約」のなかで生きるしかない人類

工業化された現代経済は、〈物質とエネルギーの物理化学的変換〉という実態をもつ。したがって「物質ターム」で考えると、「資源制約」と「環境制約」の範囲内でしか成立しえない。

ここでいう「資源制約」とは資源の存在そのものやその獲得に要する物理的限界からかかる制約をいい、「環境制約」とは使い終わった資源（廃物）の捨て場の物理的容量からかかる制約をいう。

算手段たる通貨を債務そのものからつくり出すことに他ならない。

繰り返しになるが、この「債務マネー」のもとで経済成長を図ろうとするならば、どこかの国や部門が、未来を犠牲にしたとんでもない赤字支出に踏み切らなければならぬ。それ以前に、それまでと同規模の信用創造が実際に行われなくなっただけで、マネーサプライの増大が急停止してしまふ。これに伴い、恒常的に行われて国民経済の大きな一部を構成してきた赤字支出が、必然的に止まる。それは、その赤字支出により所得を得ていた階層の所得喪失を引き起こす。こうした負の連鎖（ボジティブ・フィードバック）の結果、経済成長に急ブレーキが掛かり、経済は逆に恐慌への道を駆け下ることになる。

しかし、経済学はここに「貨幣ターム」を持ち込むことで、人間社会がこうした物理的制約から離れてあたかも「無限の成長」が可能であるかのような理論構築を可能とさせてきた。

それをシステム面で補強してきたのが管理通貨制という貨幣制度である。しかし管理通貨制の本質は、「債務の清

ここ数年で経験した一連の事態は、われわれが「資源制約」と「環境制約」に加え「金融制約」という自縛的制約の中で生きるしかないことを明確に示しているのである。（あおきひでかず・財政アナリスト）

おとなしい日本の若者と たくましい英国の若者と

優子・山形フットマン



世界景気が低迷する中、日本も英国も赤字国債を抱えて、あえいでいる。英エコノミスト誌のページをめくっていったら、2014年、日本の赤字額はGDP(国内総生産)の24.6%に、そして英国は同9.8%に達するという予想数字が目飛び込んできた。

ロンドンのシティー(金融市場)では「いつか日本がメルトダウンするのではないかと」囁かれる声も聞かれる。それなのに、今のところどうにか日本が持ちこたえているのは、国民一人一人の貯蓄力が底支えしているから。そんな堅実で固い日本人に対する信頼は世界的に評価されている。

80年代に騒がれたジャパン・マネーの神話は今もって残っており、あらゆるジャンルのビジネスにとって、日本市場は常に格好のカモとして映る。

だが、3年ぶりに日本に里帰りした私が出会ったのは、今度こそ本当に「不安な明日」の姿だった。猛暑のせいもあつたかもしれないが、街が静かなのには驚いた。買い物を楽しむ。なぜって物価が安いから。

1000円ぐらい出せば、美しい体裁の美味なランチが食べられて、おつりが来るし、素敵なブラウスが、たったの580円でゲットできた。空いた店で安い買い物にランチと、最高ではあるが、それはちよつと考えれば経済の黄信号の点滅をかいま見たも同然なのである。つまりデフレなのに、消費が低迷しているのだ。

が、一番驚いたのは若者たちの様相。なんだか、すっかりおとなしくなっちゃってしまっているのが、不気味だった。

一昔前まで、日本の学生たちはリュックを背おって卒業記念に一世一代の世界旅行に出たものだ。そうでなくてもツアーなどに参加して少しでも見聞を広めようとした。また、国内の旅もよくしたし、時には日本列島や世界に自転車で挑戦する強者たちにも出くわした。が、どうだろう。

今の若い人たちは、すっかりおとなしくなり、さながら家の中で飼われて、散歩もしないトイプードルのように。端末と携帯に魂も生気も吸い取られてしまったのか。情報を持つていることと、体験することの大切さを、すっかり取

り違えている。

そんな若者たちは、どのようになら社会に向かっているのか。まず、彼らは「新卒」として就職していることと努力する。3年生の時に何度か留年するかもしれないけれど、それは就職活動のため。留年しても、卒業してすぐに就職すれば新卒として社会にデビューできる。そして、親たちが「留学でもしたら？」と勧めても、「留学しても語学が上達するわけではないから、アドバンテージにはならない」という返事。まるで年寄りと同じ返事。まるで年寄りな世代が今後の日本を背負っていくようでは、実に赤字国債デフォルト、日本メルトダウンのシナリオもあり得るのでは、と危機感が募る。

赤字国債の量は日本ほどではないにしても、英国だって似たような経済環境にある。老大国英国は一時は「日本の未来の姿」とも言われ、日本が参考にする社会調査の格好の材料となってきた。確かに、物作りは、とっくに空洞化、純英国産の大衆自動車製造は既に死に体となり、英国人たちは日本の製造業が英国に進出して作る車を「英国で作っ

ているのだから英国製の車だ」と言い出して久しい。失業率は7・8%（2010年8月）と依然と高く深刻、この秋の新卒者たちの就職競争率は平均70倍だといわれる。まして人気大手企業ともなれば100倍以上になる。

だが、それでも英国の若者たちは皆元氣だ。それに、国の借金だって、多分解消されるだろう。日本と英国の先行きを占うなら、どう見ても英国の方がプラスチックが多いような気がする。それは楽観的になれる現実があるからだ。

英国の未来を担う人材が、そう易々と景気後退に負けないという感触がある。

彼らの元氣の所以は、彼らの後押しする社会のシステムが、日本に比べて、だいぶ柔軟だからだ。企業は、「新卒」に特別こだわらない。そして、英国の若者たちの多くは、大学を出てからも自己実現の道を歩むことが可能である。

ギャップイヤーという言葉をご存知か？彼らは、たいていこのギャップイヤーをとる。猛勉強した後の休息期間のようなもので、1年間のブランクをわざと作り、自分が常ひごろからやりたいと思っ

ていたことに挑戦する。チャンスは二度ある。最初のギャップイヤーは、高校卒業試験が終わった年。次は大学卒業直後である。そのための資金はアルバイトで稼いだり、両親に卒業祝いとしてもらったお金だったり、親からの借金だったり、千差万別である。

その間、どんなことをやるかという点、これも人それぞれではあるが、たいていは世界冒険旅行に出る。バックパックを背に友人とともに地球を進行する。大学で英文学を専攻することに決めた、ある女学生のギャップイヤーは、料理学校でフランス料理を習得する傍ら、さまざまな英文学を読破するというものだった。その好き勝手な一年が終わってからは、おもむろに大学生生活を開始する。また、ブラジルの熱帯雨林に滞在してボランティア活動をする人や、日本で日本語を学ぶ人など、さまざまだ。

もう一度とるギャップイヤー、つまり大学卒業後の方は、正規の就職前の小手試しのようなもの。新卒として就職する代わりに、彼らは卒業証書を片手に、例えば欧州諸

国に出向き、英語を教えるがら生計をたて、ドイツ語やフランス語を習得、日本政府の募集に応じて、日本の学校で1年間英会話の教師として働いたり、等々である。

企業側も履歴書の項目で、ギャップイヤーにどんな経験をしたのかと興味を持つ。つまり、経験が豊かであることを高く評価する。経験があれば、人間関係を築く点でも、企業の危機対処も創造的にこなすことができる、企業側は考える。

新卒募集も当然ある。グラジュエイト・スキームというもので、新卒対象の企業リクルートである。ただし、日本のように一斉にというのではなく、募集時期はまちまちだ。例えば、公務員は春募集、一般企業は秋募集という具合である。公務員志望は秋に卒業した後に、就職が決まるまでアルバイトなどをして時間つぶしをする。卒業前に早々と就職が内定している人もあれば、卒業してから、おもむろに腰を上げる輩も多い。要するに、日本よりも、のんびりしている。

就職後もフレキシブルだ。大手企業に就職した新卒も

「終身雇用は期待しない」。P Rコンサルティング会社の厳しいリクルート関門を通過して採用された、ある青年は「キャリアは変えるつもりはないけれど、この分野で自分に何があっているかというのを見極めるためにも、数年したら会社を変えたい」という。つまり、自分にとって、どんな仕事、何があっているかを生涯探すことが許される環境

スコットランド・スターリング大学の卒業式で



があるといえる。確かに、最近では企業が米国型の「ハイヤー・アンド・ファイアー」寄りになって来て、「雇用は決して安定している」とは言いがたい。が、それだからこそ、彼らは自分の資質を磨く方向に進むわけだ。

日本はどうだろうか。転職は昔ほど罪悪ではなくなっているが、それでも終身雇用が望ましいと考えるだろう。企業は未経験、白紙同然の新卒が大好きだ。つまり企業が求めるのは将棋の駒で言えば歩兵。換言すれば金太郎飴的な労働力。それは、次から次へと登場しては消えるもの。自分がいなくても常に二軍が控えている戦力である。そういう戦力は、保護されている純粹培養の労働市場でだけ、獲得が保証されるものである。保護された純粹培養の労働市場なんて英国にはあり得ない。植民地時代の影響で歴史的に移民が多い上、難民もたくさん受け入れている。英国は通貨統合こそ参加していないが、人、物、金の動きが自由となる欧州統合市場の一員であることは間違いない。それ故に、EUメンバー諸国の人間なら誰でも英国に来て、

英国の労働市場を荒らしまくることが可能である。逆もまた然りだ。最近ではポーランドやロシアからの移民がふくれあがり、英国人の仕事を横取りしていくケースをよく耳にする。

確かに移民が怒濤のように入り込んでくる状況は、英国人にとって頭の痛いことではある。労働能力が凸凹になる上、一般の英国人が移民と競争しなければならなくなる。

しかし、その一方で、この老大国は移民に刺激されて経済成長を続けているともいえる。移民が持つ技術、彼らを持ち込む言葉や文化は老大国にとっては新鮮な輸血にも等しい刺激になる。異文化との融合から生まれるトレンドは経済活動の起爆剤にもなってきた。そして若者たちは、ひと昔前の英国人に比べて、もっとコスモポリタンになってきている。

換言すれば、人種のるつぼだからこそ、確固たる「英国人」としてのアイデンティティーを持つことができるようになったのだ。彼らは、平然と世界と共存できるまでに成長してきている。そんな子供たちの親たちも、娘や息子

の結婚相手の国籍をいちいち取りざたしない。人種を超えた「人間の社会」がそこには形成されつつある。同じ英国人でも肌の色などがもう、まぢまぢだからだ。

ちなみに英国国籍を持つ英国生まれの中国人を称してBBCという。ブリティッシュ・ボーン・チャイニーズの省略だ。そんな具合で、インド系、ロシア系、アラブ系などなど移民の子孫たちが、胸を張って「英国人」つまり「ブリティッシュ」と言い、めざましい社会進出を遂げている。競争が激しいから、突拍子もなく優秀な、飛び抜けたような若者たちが出てくることも多々ある。

日本の労働市場も、以前は国内だけで回っていてもおおいに刺激のあるものだった。つまり、日本列島という非常に豊かな地方差を持つ人々が中央に集まることにより、地方文化差間の融合が生じ、その結果として、国は経済面でも精神面でも豊かになっていった。まさに、昔は激しい個性のぶつかりあいがあったのだ。

三代目の時代 がやってきた

しかし、上京組3代目、4代目の子孫の代にもなれば、戦後の一貫教育も手伝い、

すっかり一巡、金太郎飴型が定着してしまった。もう、国内だけで刺激材料を確保するのは、難しくなってしまうわけだ。後は、同じパイのとりあいが残るだけ。

日本LTDの強みは、金太



新卒のフォーラムで笑っている若者たち



金融街力ナリーワーフ付近で

郎館の一大工場であり、高度で献身的な労力確保ができる点だった。月に140時間、場合によっては離業的な300時間の残業を社員に強いことも可能だ。が、その利点はもう限界にきている。横並びになろうとするから余計に、壁にぶちあたる。

今、必要なのは、新しい血

も取り上げられており、要するに「日本人は差別する」というコメントが書かれていた。親たちは子供たちが、お相手として選んだ外国人を連れてくれば、いまだに目くじらを立てる傾向にある。「騒がなければ、いつかは別れてくれるだろう」というのは、よく耳にする言葉だ。純粹培養こそ日本人が望む社会で、労働市場も願わくば純粹培養が好ましいはずだ。

なる。政治家が重要だ。英国がこれまで、どうにかこうにか前進できたのは、良きにも悪しきにも、国を引っ張る強いリーダーがいたということに尽きる。

以前よりも、ずっと緩やかだし、若い人たちは、こだわりがなく、くつたががなく自由だ。面白いのは、保守党政権下なのに、階級制度がぐらついた点である。

ブレアは何をしたか

次に強いリーダーとして印象深かったのは1997年からの10年間で、首相を務めた労働党のトニー・ブレア氏だ。

移民が駄目なら、女性解放はどうだろうか。女性の進出も前よりは目覚ましくなったのは事実だ。が、女性が活躍しようとすれば、女性を閉め出そうとする負の力も働く。なにしろ、出る釘を打つ、変化を嫌う金太郎飴国家なのだから。

では、リーダーはどうだろう？ 仲間内の館に冠をつけることは許さない。つまり、リーダー教育をしないし、また、リーダーの素質がある人の足は、仲間内で引っ張りあう。だから、最終的には形骸化した上下関係のピラミッドだけが残る。日本人は自分で自分の首を絞めるのが、なぜこんなに上手なのだろう。悲しく

ブレア氏の政権時代を顧みると、もしかして、彼は保守党だったと言ってもおかしくない。サッチャー政権下でおこった社会のうねりの大筋をブレア氏も涼しい顔をして引き継いだから。

その結果、奥ゆかしい昔気質の英国人は今ではすっかり影をひそめてしまったが、社会を膠着させてきた、英国の最悪のピラミッド、階級制度には風穴がこじ開けられた。いまだに階級社会は残るが、

そして興味深いことに、サッチャー女史が若者たちにトレンドを仕掛けたように、ブレア氏もまた、「クール・ブリタニア」というスローガンを掲げた。それは新しいクリエイティブ産業の擁護で、斬新なデザイン、クールなライフスタイル等、ヴィジュアル的な新しい英国のイメージを後押しするトレンドだっ

た。これは若者たちをおおいに刺激し、彼らにわかり易い、新しい英国のヴィジョンを夢見させることに繋がった。つまり、サッチャーもブレアも、経済刺激策の一貫として、「新しい英国人のあり方」にまで言及した。

今年の総選挙で、英国は連立政権を立ち上げた。しかも、向こう5年間は続く約束の基にある保守党と民主党の連立だ。これは、労働党の敗退ではあるが、また、従来の保守党の敗退でもある。

つまり、サッチャー女史の後のブレア氏という成り行きを見ても、政治家たち自身も右でもなく左でもないニュートラルなリーダーになつてきている上、国民も昔から色濃かった左や右の味付けではない政権を望んだと言えよう。新連立政権は「党派にこだわらず、赤字国債解消に向けて国益と国民を優先するために協調する」姿勢を鼓吹している。

英国は社会階層の緩和、政治面においても融合、そして雑多な人種のもつとに、欧州という統一融合市場を背景に持つ。換言すれば、テーゼに対するアンチ・テーゼが常に

目の前に立ちはだかるから、弁証法が成立し、そこにダイナミズムが生まれ、社会は進化する。結果的に若者たちは、幅のあるヴァラエティーに富んだ社会の中で、自分の居場所をみつつけようとする。それは簡単なことではない。が、世紀を経て、移民等の津波のあおりをくぐって来た、この国の若者たちは当然、磨かれ、強くなる。

取り残される日本

移民はいらない。女性進出にもニヤニヤ。強いリーダーのいない金太郎飴製造国家。白紙の処女新卒を尊重するあまり、若者達の夢や志やエネルギーをがんじがらめにしてしまい、彼らの芽が摘まれていく。弁証法の進化論どころか、じっと動きたくないのが日本人社会だ。

もちろん志のある若者もいる。だが、彼らが自分らしく生きようとすると、モグラ叩きの刑にあう。

日本人は、なぜ人と違うこと、自由であることを、そんなに恐れる国民になり果てて

しまったのか？こんな調子だと日本が、地球コミュニティの中で取り残されて行くことは自明である。グローバル化が進む中、日本は再び鎖国に逆戻りしているように思えて仕方ない。

日本の若者たちに未来に向けた方向性を指し示すことのできる政治家はいないのか？日本人は、これと思うリーダーが出て来たなら、サポートすることはできないのか？

日本人は世界の人々と本当の意味で手をつなげないのか？企業はそれほどまでに社員の残業に頼らなければ利潤を上げることができないか？

朝の7時半に出勤し、夕食は自分一人で最寄りのそば屋でかきこむという、あるサラリーマンに、そのライフスタイルをどう思うかきいてみた。

「まあ、今までも、ずっとこうやってきたんですから」とも聞かせる。若者たちにとつて、社会に出るといふことが、夜の街で一人で食事をかき込み、また会社に戻るといふようなライフスタイルなら、彼らが萎縮して当然だ。

それではまるで、軍に入隊するも同然だ。戦後の日本が高度成長を達成した時、日本の未来をユニークに指し示すことができたら、今の日本はだいぶ違っていただろう。

日本を滅びに いざなうもの

ハーマルンの笛吹き男の話をご存知か？ 笛吹き男の笛の音につられ、街を荒らしていたねずみたちが、川に誘導されて全滅する話だ。ひょっとしたら日本にも、日本人たちを破滅に誘導するハーマルンの笛吹き男がいるのではないか。

いるとしたら、いったいそれは誰なのだろう。どんな顔をしているのだろうか？

戦後65年、平和な世の中になつたはずなのに、日本の一部の企業には戦争中の軍部の香りが残っていないか？ サラリーマン達の中には鬼軍曹を彷彿とさせるような連中が、いまだににいるのではないだろうか？

リーダーの足を引っ張ろうとする人たちは、憲兵の動きに通じているところがないだろうか？

若者たちは徴兵検査に通るために、自分を規定にあわせようとする志願兵のように「新卒」を狙うのではないか、自問する必要がある。「そんなことはない」と、胸を張って言えるなら、それにこしたことはない。が……

敗戦国だというのは理由にはならない。問題は敗戦ではない。戦争責任を真っ向から直視することなくして戦後を走り続けて来たことこそ問題なのだろう。私たち日本人は、個人レベルでも国レベルでも、案外と戦争の形骸をいまだに引きずり、それを無意識のうちに、子孫代々に受け継いでしまつてはいないか。

私たちの大切な子孫、しかも少子化で人口が激減してしまつているこの若い世代に対し、何ができるかを、一人一人が真剣に考える時が来ている。今、勇気ある変革に向けて、一人一人が立ち上がらなると、本当に手遅れになるかもしれない。

(ゆうこ・やまがたふつとまん・フリーランスライター)

八月三日、参議院議員会館に、全国の原子力発電所をかかえる地域から、反対運動に携わる市民たち五〇名あまりが集まった。使用済みMOX燃料を使った原発の稼働の中止に追い込むためである。

MOX燃料とは、原子力発電所の使用済み核燃料から出たプルトニウムを再処理して取り出し、再びウランと混ぜて燃料として軽水炉で使用で

きるようにしたものをいう。この再利用方法が「プルサーマル」だ。

プルサーマル化は、ただでさえ危険な原発の危険性を計り知れないほど高める。これによって出る核のゴミの捨て場がないからだ。

阿部悦子県議を訪ねて

八月三日の交渉で、鋭く真摯な質問を投げかけた人の中に阿部悦子愛媛県議員がいた。阿部さんはほぼ全員与党

の県議会で、セクハラ、パワハラにまみれながら、支援者とともに地域住民のため働いている議員である。

阿部さんの原発反対のきっかけはチェルノブイリ事故(1986)だった。

この事故は原発の「出力調整実験」の失敗によって起こったものである。

「ところが、それと同じ出力調整実験を、伊方原発で行

活断層とはいわば地震の巣。国内でもとりわけ広い地域にまたがり、エネルギーも大きいとされるのが活断層

「中央構造線」である。佐田岬半島は、中央構造線に沿った細長い陸地なのだ。

二〇〇九年には、県内の小学五年生が代表となった「プルサーマルをやめてください」という請願署名(二八八名)が議会に届けられた。

原子力発電所の真実

山口遼子

うというんですね。当然反対運動が起こりましたが、これは実は九州の女性たちが中心

となって、愛媛県の女性たちを巻き込んで起こった運動なんです」

伊方の女性たちといっしょに、阿部さんも四国電力と交渉を重ねた。みな死にもの狂いだった。

「さらに大きな問題は、伊方原発のすぐ沖には世界最大級の活断層があるということです」

民の息吹が感じられる。困難な道だが、ぜひがんばってほしいと思う。

伊方原発を訪ねる

翌九月一日、現実の伊方原発を見に行った。伊方町があるのは、九州に向かって剣のように細長く突き出した全長約五六キロの佐田岬半島。原発は半島の付け根に近い、瀬戸内海側に位置している。

現地を待っていてくれたのは、斉間淳子さんと近藤誠さん。斉間さんは亡くなった夫の満さんとともに原発反対を掲げたローカル紙「南海日日新聞」を発刊し、原発の真実を勇気をもって書き続けてきた人だ。近藤さんは同新聞の

記者として、また原発の闘士として最初から活動してきた人である。

近藤さんの車で、八幡浜の市内から山間部に入っている。原発へ行くために造られた道路はトンネルが多く、最初のトンネル入り口には検問所があり、何かあった場合には封鎖できるようにしているのではないかと近藤さん

はいう。

半島の背骨のように高い見晴のよい場所に、原発見学のためのビジターハウスがある。ここから瀬戸内側に少し下っていくと、海に浮かぶように建てられた「四国電力伊方発電所」が見えてきた。山の中腹から見下ろすと、ゲートが二つもあり、検問はたいへん厳しいそうだ。

発電所には緑・白・黄に塗り分けられた三つの巨大な炉がある。超高温・超高压のウラン燃料を入れた炉やタービン・発電施設。電力会社や国がいうように、これらは本当に安全なのだろうか？

「安全ではない！」と、全国原発の近くに住む人たちはみな口をそろえている。実際、事故はあちこちで起きている。

たとえば一九九九年、茨城県東海村JOC核燃料加工施設での臨界事故では、周辺地域への避難命令が出、職員二名の死者を出した。先天性の障害を負った新生児も何人か生まれているという(公表はされていない)。

二〇〇四年には関西電力美浜発電所では高温高压の蒸気が漏れ、五名の職員が亡くなった。

二〇〇七年には新潟県中越地震の際、東京電力柏崎刈羽

原発で火災事故が起き、放射能漏れが起きている。

このほかにも小さな事故や施設の破損などはいくつもあ

る。しかし報道では大きくとりあげない場合も多く、右のような重大事故についても企業側の発表をもとにした記事が多く、どれだけ真実を述べているのか、第三者機関からの検証はされているのか、疑問だらけなのだ。

ここ伊方では一九八八年、対岸の岩国から飛び立った米軍のヘリコプターが、原発からたった八〇〇メートルという近さで墜落事故を起こしている。原発の目と鼻の先である。

「中央構造線は原発のすぐ目の前にあるのですよ」と、近藤さんは、海を指さしながらいう。

発電所の目の前には東西に伸びる川のように急に落ち込んだ活断層の溝があるという。

「発電所からは毎秒約一四〇トンもの温排水が海に排出されているんですよ、それは海水より七度も高いのです」と、斉間さんもいう。当然高い温度を好まない魚たち

はいなくなり、テングサなど植物の生育もきわめて悪くなったとのことだ。

景色は限りなく美しい。原発のある海岸はヒスイ色に澄み、沖は風いで青く輝き、瀬戸内の島々や対岸の広島県、遠くは九州の大分県まで見晴らせる。

「あの島は山口県の祝島。あそこにも原発の建設計画が進んでいるのです」

近藤さんが指さす先は、瀬戸内海をはさんでせいぜい四〇キロくらいだろうか、小さな島がある。こんなに近くにさらに原発を建てようというのか！

「近藤君はね、四電から原発の取材を禁止されていたのですよ」と斉間さんがいう。

「南海日日新聞で、原発に批判的なことばかり書いてきましたからね」

批判を書かれれば堂々と受けて立て、という正論も、なりふりかまわず踏みこむるすさまじさ。が、近藤さんは冷静にいう。

「ほかのジャーナリストがちゃんと取材をすればいいのですが、実際は四電や国のいうとおりのことを書くだけ。大新聞の記者の中に気骨を

持って取材する人がいても、すぐに転勤していつてしまますから」

ビクターハウスでの話

ビクターハウスは原発の必要性、しくみ、安全性などを人々に啓蒙するための立派な施設である。入口に大きな緑色の岩石が鎮座している。原発の基礎をささえている地層にある「緑色片岩」だそう

だ。「これは本当は『緑泥片岩』というのです。もともとは泥岩だから、さわった感じは硬そうだけれど、水分を含むと硬度は十分の一になってしまいうそうです」と、近藤さん。

「昔、福島原発で内部の不備を告発した職員がいました。しかしその際、通産省(当時)は、その告発者の氏名を電力会社に公表したのですよ、孤立させるためだったのではありません」

これでは中何が起ころうと、だれも何もいわなくなってしまう。順路にしたがっていくと、心地よい休憩室にたどりついた。くつろぎの空間で、大きなガラス窓の外はまさに絶景。北側は瀬戸内海、南側は宇和海と伊方の町だ。小さな湾を抱いた、半農半漁

のマチあるいはムラ。平和で穏やかな日本の風景の名残があった。

休憩室のそばの廊下には、伊方原発を中心にした航空写真が何枚か、直径一メートルくらいの円にしてはめこんである。

紀伊半島と九州を含む写真を見て、「あつ！」と思った。諏訪湖あたりに端を発する中央構造線は、紀伊半島の紀ノ川を通り、四国の吉野川につながり、佐田岬半島に寄り添って、九州は別府湾南部から熊本三角半島までを一直線に貫いているということ

が、一目瞭然なのだ！ 生きて、動いている日本列島の、その最も活動的な部分は、原発の資料館にちゃんと示されているのだった。

見学している間、中年の男性が一人つかず離れずついてくる。斉間さんも近藤さんも反原発の「有名人」だからだろうか。

これは「侵略」の構図だ！

ビクターハウスを後にして、再び車中の人となった。ここまでの往復の間には、ときどき山道の敷に「原発反対」という看板がかけられてい

た。かつてはもつとたくさんあったのだろう。

「看板を出すのもたいへんなことなのです。看板の設置場所からだれが原発反対なのかわかってしまう。ここで生きていくには覚悟が要るので」と近藤さん。ただ、中には今でも土地を売らずにがんばって反対の意思表示をしている人もいるという。地元の人さんという女性だそうだ。「ビクターハウスの坪庭の向こう側にハンタイの看板を立てたんです。そうしたら四電が植え込みをしてお客さんから見えないようにしてしまつた」と、斉間さん。

近藤さんはこんな話をしてくれた。

「四電は伊方に原発を造る前に、四国の中で二か所交渉をして失敗しているんです。最初から『原発をつくる』と明言したから地元の大反対にあつて失敗した。だから伊方には、原発なんて一言もいわないで土地取得に走つた。地方ではよくある方法ですが、町の職員、地元の有力者に働きかけて、土地所有者に手放すよう説得させる。どうせ使つてない雑木林なんだから、日本のタメにもなるし、

相応のカネも入るし：などと
言って。またその際、『発電
所建設に不適地だったら契約
は解除する』という条件もつ
けたから、多くの地主は売る
ことに同意したのです」

ところが、原発建設はもと
もと決まっているのだから、
不適地などになるはずがな
い。原発ときいて解約を求め
た地主の要求は却下されたか
ら、ほとんど詐欺のようなも
のだった。

「ある老資産家Iさんは、
絶対に土地は売らないと突っ
ばねてきたのです。しかし奥
さんが、圧力に耐え切れずに

自分名義の土地売却に応じて
しまった。Iさんは激怒して、
一時は夫婦別居したのです
が、四年後奥さんと和解しま
した。けれどその翌日、奥さ
んは首をつって自殺したの
です」

Iさんは「妻は四電に殺さ
れた!」といった。

斉間さんはいう。「田舎の
人は、役所や有力者にいわれ
れば信用してしまうものなの
です。悪いことにはなるはず
がないって。それを逆手にし
とって、何もかも奪ってし
まった。『原発ができれば過
疎の町もうるおう』なんてい

われましたが、全く逆ですよ。
たとえば工事が始まれば、安
全なところは大手の会社がや
るけれど、最も危険でたいへ
んなところだけ地元任せら
るんです」。

その陰で、誘致に手を貸し
た人々(主として有力者)へ
の見返りは少なくなかったは
ずだ。それも、電力会社が吸
い上げる莫大な利益からみれ
ば微々たる端下金であろう。

「国と四電が手を組んで、
伊方の町をめちゃめちゃにし
てしまった。住民たちは土地
を奪われ、仕事(最も反対し
たのは漁民たちでした)を奪
われ、地域は破壊されました。

『よそはもつとカネをもらっ
たのではないか』などと疑心
暗鬼にとらわれ、『どこそこ
は反対派だからつきあわない
ようにしよう』と、住民同士
が疎遠になったり、健康被害
——統計上の証拠はないけれ
ど、ここは確かにガンになる
人が多いのです——、放射能
への恐怖だけが残され、未来
までも失わされてしまいました
」

県議である阿部さんが最も
気にかけていたのもこの点
だった。伊方町は県の中で最
も人口減少が激しいのであ

る。若い人、お金のある人は
他へ移ることもできる、しか
しそうでない人には選択肢が
限られる。当然子ども数も
減るだろう…。

「国策」とは

いったい何なのか?

現在、日本では五〇基以上
の原子炉が稼働している。そ
れに対して、冒頭に述べた「使
用済MOX燃料を憂慮する」
全国の市民団体は、七九四も
ある。

これほどたくさん国民が
反対している原発を、なぜ
「国」は推進しつづけるだろ
うか? 錦の御旗のように
「国策」というが、そもそも
国民の命こそ一番基本にある
べき国策なのに、なぜこれほ
ど、なりふりかまわず造り続
けるのか?

確かに、戦後から高度成長
期にかけては、日本を工業立
国とするために必要な電力需
要はあったといえるだろう。
しかし実際には、現在の電力
需要は火力・水力・風力で十
分まかなえるのだという。さ
らに火山国日本には豊富な地
熱が眠っている。これだつて
発電力の大きな資源なのだ。
にもかかわらず?

その陰には、岸信介・佐藤
栄作、そして中曽根康弘らの、
「核への野望」があったから
だとさえささやかれている。
合法的にプルトニウムをため
込むこと、いざとなれば核爆
弾を何百発と作る能力を維持
すること。そのために、不
要なほど多くの電力をつくる

原発が必要なのだ…。
それとは別に、民主党の中
には電力総連を母体とする議
員グループもあって、原発推
進を支持しているらしい。

さらに、国民自身にも問題
がある。特に都市周辺に住む
人たちには。
「私たちは奪われたものは
あっても、恩恵は何も受けま
せんでした。生産された電力
すら、すべて都会へ行つてし
まうのです」と、原発の近く
に住んでいる人たちは血を吐
くようにいう。

便利で快適(?)な都市イ
ンフラ、過剰なまでの電飾。
真夜中までガラガラと輝く都
会は、欲望そのもののように
電力を喰らい続ける。
それを当然のように享受す
る私たちは、同じ日本人の様
牲の上に生きている。

(やまぐちりょうこ・フリー
ランスライター)



斎間さんと近藤さん

日本に永く住む 韓国人のわたし

金 吉 宰
キム キル ジェ

8年前の2003年、暑くなり始めた6月23日私は22才の年で来日した。済州の大学で日本語を専攻したが、本場の日本語を習うため、

日本に来た。韓国ハワイと呼ばれる済州島(チェジュ)

は外国人観光客の中、ほとんどが日本人であり、日本語さえ上手く出来れば、良い仕事も安定的な収入も得られる。

その当時、大学で勉強してきた日本語では一言もはっきり言えない実力だった。テキストで習ったことしか出来なかったし、実際に日本人と話

してみたのは学校のネイティブスピーカー教師だった本田先生と小川先生二人しかいなかった。その実力では就職を

しても笑いのものになるのは当然で、出世できる保証もなかった。大学で学生会幹部であった私は卒業後、就職先が

保障されていて他の学生たちより有利な立場だったことは事実だった。だが身に付けた

実力の限界を感じ、本場の日本に直接行って日本語を習おうという固い決心で日本留学を決めた。当時の日本留学は多くのお金が必要だけでなく手続もあまりにも複雑だった。保証人が必要なのみなら

ず銀行残高証明などの色々な種類の書類も用意しなければならなかったため、2カ月という長い時間と手間がかかった。

そして、いよいよ夢の日本留学が始まった。今では済州と成田の間に一日一便の直航便が飛んでいて結構便利だが、当時は釜山(プサン)を経由して日本へ行く方法しかなかった。日本へ行くのに、

済州空港で国内線に乗って釜山まで行って、また釜山で成田行きの飛行機に乗らなければならなかった。済州出発の

当日、家族と親戚、友人達が空港まで見送りに来てくれた。その時を振り返ってみると確か、お母さんの前で泣いたと思う。軍隊の話は後ほど

ように。(軍隊の話は後ほど)初めて日本留学を決めた時は日本で2年だけ勉強して韓国に帰るつもりだった。

2年だけ勉強すれば大丈夫だろう。と思った私が日本に残るなんて思いもしなかった。

日本で韓国人として8年も過ごして見たら本当に私が日本人に成っていくような気がする。時々韓国に行くとなかなか慣れなくて苦労した事が

結構あった。例えばバスに乗った時、料金がいくら分からなく、1万ウォン札を出したせいで運転手さんに一言言われた事もあったし、(基本料金・700ウォン)、韓国語が分からなくて、日本語の単語を使って話すと、何か偉そうに見られちゃったこともあった。見た目は韓国人なのに、日本人ばい私が珍しい。ニセ韓国人・金吉宰。

8年前の日本と今の日本は韓国に対する視線と考えが結構変わったようだ。

初めて日本にきた時は韓流というブームはおろか韓国人だとそれとなく無視されたこともあった。韓国人でなく朝鮮人だと聞いたこともあったし、家を探しても外国人だと断られたこともあった。しかし、今は変わった。どこへ行っても韓国人といえば先に「ア・ニヨンハセヨ」といいながら挨拶する日本人が増えたとし、ニュースとインターネットを見て韓流スターの一手一投足と韓国旅行・歌・ドラマ・歌の人気、前は見られなかった韓国に対する熱い反応を感じる事ができるようになった。

現在、旅行会社で仕事をし

ながら実感出来るのが韓国を訪問する日本人観光客数が円高現状と共に減る気配がない事と、前からずつとブームだった韓流ドラマの人気は今でも続いて、テレビを見ても毎日一本以上放映されるほどその人気は冷める気配もない。

また、最近ではドラマだけでなく韓国の若いギャルグループの日本デビューも多くの人気を得ているということに「韓国文化第2空襲」と述べた新聞記事に同感することになった。そしてこの韓流ブームは継続されるだろうと考えている。

個人的にはペ・ヨンジュンが大好きだ。冬のソナタのペ・ヨンジュン氏のおかげで韓流ブームが起きたし韓国に対するイメージが変わったと思う。更に韓国語を習う人も増えたし、韓国ドラマに夢中になった人、韓流スターにはまった人など日本と韓国はより一層近くなったのは確かだ。新大久保の韓流ショッピングの数とそこでショッピングする日本人の数が増えたことがその証拠に間違いない。

韓国に帰らなくても日本でもできる仕事がたくさん増えたことで私は新しい決心をすることになる。日本の大学を卒業して日本で就職しようと考えるが変わったのだ。恐らくヨンの影響があったのではなにかと思う。

このような事で2年だけ勉強して帰ろうとした私の目標が変わって、私は日本で長く住むことになった。そして帰るつもりもない。帰るということが負担で恐ろしい。完全に日本人になって行くという感じが嫌いではないが、それでも良いともできない不明瞭な気がする。訳のわからない寂しさ。

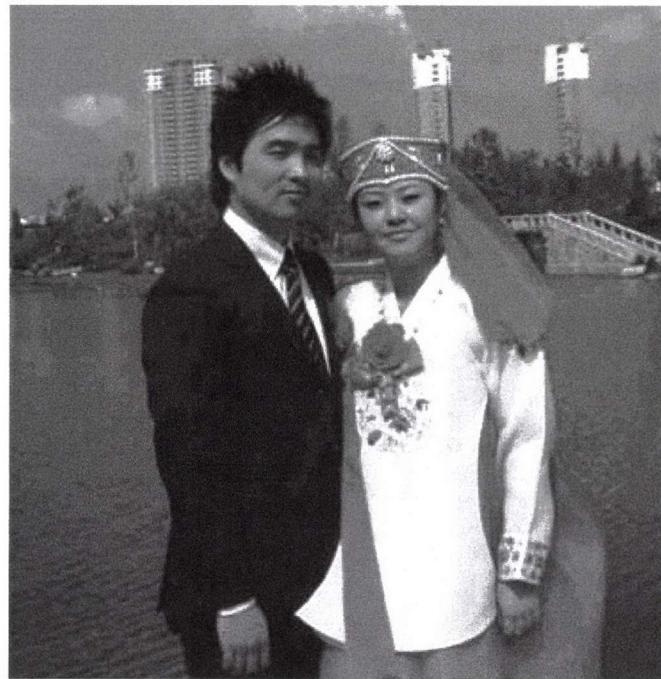
日本人にとって韓国はどんな国であろうか？ 韓国に関してどれくらい知っているだろうか？ 韓国は北朝鮮と分けて敵対視しており、いつ戦争が起きてもおかしくない危険な国で、離散家族が8万人、分断国家の痛みを分かる日本人は多くないだろう。

ただ北朝鮮との戦争が少しの間止められている状態を知っていたり、北朝鮮は共産主義国家でキム・ジョンイルという独裁者の治下の国民、

いや人民達が苦勞しているという程度；、私ももちろん戦争というのは遠い国の話だと思っていた。

しかし、この前起きた西海（ソヘ）の哨戒艦沈没事件とその一連の事件を見て私は本当に驚いた。韓国政府の発表

ならない一つの事実は、大韓民国の元気な男は20才になれば軍隊に行かなくてはいけないことである。日本人にとつて軍隊というのは幼い時に憧れた射撃ができる所、素敵な服を着て訓練をするということと同時に韓流スターの



によれば犯人は北朝鮮だというが、本当に戦争が起きてしまうかどうか。毎日、ニュースや各種メディアの放送などを見てどうなっているか心配したこともあった。

まだその事件で韓国は騒々しい。ここで注目しなければ

ように筋肉マンになることができるスポーツクラブのような所だと軽く考える人も多いが、実際軍隊に行ってみたらもう二度と行きたくない、うんざりする所が軍隊なのである。毎日繰り返す訓練、制限され、節制されたかたい生活など、行ってみなかった人

はきっとわからないだろう。大韓民国国民として兵役義務を守らなければ処罰されて、社会的に多くの不利益をこうむるのが韓国の現実である。今回のチョナンナム事件で死亡した48人、青春真っ盛りの年齢に命を落とした若者たちのことを考えると残念でならない。子供を軍隊に行かせたのに冷たい死体になって戻ってきた両親の心はどうだろうか。考えただけでも胸が痛い。これが現在の韓国の姿である。それから、もう一つの現在の韓国の一面が見られるのが教育問題である。韓国の教育の現実を考えてみると実力、成績中心の社会、ライバルより劣ると無視される社会、ひたすら一流大学だけを求める風土は今の日本も同じだと思うが、韓国はよりもっと激しいようだ。

子供が賢くて他人より優れば良いが、そうでない場合、子供の人生は一流ではない三流になってしまう韓国の現実には心配で恐ろしいだけだ。他人に負けないように韓国では幼稚園に入る前から英語教育をさせる。ピアノ、数学、雄弁など、早期教育ブームでお母さんたちは疲れ、お父さん



たちは腰がよじれるほど必死

でお金を稼いで子供たちに勉強をさせているのが今の韓国だ。ある新聞によれば経済協力開発機構(OECD)23

カ国の中で韓国の私教育費支出が最も多いそうだ。他の人より後れてしまえばそれで終わりという競争意識に捕われた韓国の子供たちは母国語の韓国語はあまり重視せずに、

たくさんのお金をかけ英語に力を入れてるのが韓国の現実だ。

英語は韓国では絶対的だ。幼いころからの英語早期教育は当たり前で、就職をするためにTOEIC、TOEFLの高い点数が不可欠だ。だから外国で英語を習う語学研修のブームで韓国の子供たちはもちろん両親もその負担が大きいのである。

アメリカのオバマ大統領がアメリカ教育改革の見本で韓国教育を奉る発言をたびたびするが韓国人にはそれがそんなにありがたくないようだ。教育の質を向上させるために学校間の競争を誘導して、無能な教師を退職させるなど話では本当に甘く聞こえるかも知らないが韓国の教育の現実をまともに把握できてないと

いうことが惜しいだけだ。

私を通った高校は済州で有名な名門高校だった。小さい済州の中でソウル大学合格者数が何人出るかが重要であり、学校間の競争が激しかったため、ソウル大学に進学させるために強制的に夜11時まで学校に残されて勉強したことを思い出すと、軍隊と同じく再び帰りたくない思い出

になってしまふ。

このような韓国の教育の状況は日本も同じであると思うが、韓国はなぜ教育に熱中するのか考えてみると、アメリカとヨーロッパでは人類のために貢献する人が認められて尊敬されるが、韓国では個人的に成功・出世することが周知から認められて名誉と地位・金を得ることができると韓国人はひたすら個人的な成功のために学業に全力を尽くしているのではないかと思う。韓国には「声の大きい人が勝つ」ということわざがある。単純に声の大きい人が勝つという意味ではなく、力、お金、権力がある人が勝つという意味だと私は解釈したい。それが現実だ。

日本を意味する漢字の「和」。調和とこの漢字がとて

も気に入る、もちろん韓国人に調和がないというわけではない。国民が一つにまとまれば、本当にどの国にも負けな

いほどの団結力を見せる強い国だが、すぐ冷めてしまう国民、政治も常に地域偏重で地域中心の政党だけ支持する地域エゴイズム、水と油のように混じらないのが韓国人なのだ。

今まで韓国の短所だけ述べてきたが、韓国人だつてすべてが悪い訳じゃないと思う。最初に言ったように韓国人として自慢、誇りを感じるの

は単に韓流ブームだけでなく、韓国の経済発展、世界の中心にある韓国、1950年朝鮮戦争で全て破壊された国が半

成し遂げた韓国人の不屈の意志、漢江(ハンガン)の奇跡。資源に恵まれてないが、世界のどこの国にも負けないIT強国、スポーツ強国、この小さな国が世界でも日本でも認められているということだ。

私の話に戻って、8年間の半分は学生としてアルバイトをしながら勉強してきたし、その後、会社員になったと同時に結婚、妻の妊娠、出産など、たくさんの出来事があった。そして、今は会社員として一生懸命仕事をしている。しかし、なかなかお金を貯めることができないのはなぜだろうか。日本と韓国の物価を比べてみるとやはり日本の方が韓国よりはるかに高い。給



しながら勉強した。

しかし、いくら頑張ってもアルバイトをしても学費すべてを稼ぐことは不可能なことだったし、しようがなく、少しずつ両親に手を借りたりしながら無事に大学を卒業して、幼い時から憧れていた旅行会社に勤めるようになった。大学生の時、秋葉原にある免税店で今の妻と出会って結婚まで至った。今年1月長男ミンホが生まれた。生まれ3カ月になった時、両親がミンホを私代わりに面倒をみてくれている。なぜミンホが日本ではなく韓国の両親のそ

ばにいいのか。その理由は自分にある。日本ですと私のそばで育てたかったが、私には今ミンホを育てるほどの余裕がない。就職し、何年間給与をもらっていても、結婚、妊娠、出産などにお金を使いすぎたし、家賃を払って生活している私にとって貯金というのは夢のようなことである。また、ミンホの未来のために幼い時から英語教育をはじめ、色んな教育をさせたい気持ちには私を悩ませる。

私も当然、他の両親と同じく息子のミンホちゃんのために何でもやってあげたい気持ちでいっぱいだ。韓国ではいくら両親が大変でも子供の未来のためなら、すべてをかけた投資するのは当然なことになってしまった。アメリカと日本では成人になれば子供が両親から独立して自分の力で生きていくのが当然だが、韓国は違う。子供を大学まで勉強させ、結婚まで面倒をみるのが親の義務だとほとんどの人が認識している。自分の子供が良い配偶者に会えるように金銭的にも精神的にも支援していくのが当然なことであり、両親の財力により子供が良い相手に会うことができるということ韓国で両親は成人になって社会人になった子供のためにある程度儲けてお

かななくてはいけないという強迫観念を持っていることが韓国の現実である。だから韓国の両親は子供のために一生、努力しているのである。

ばならない義務があり、祭事のような家のあらゆる行事を引き受けなければならない責任がある。長男である私はますます大きくなって行くミンホはもちろん両親の心配まで色々な悩みで、頭が痛い。肩が重い。

今、外国で生活している私の考えや習慣は日本中心に変わったし、これからはもともと日本人のようになって行くのは確かなことだと思う。しかし、私の体には韓国人の血が流れており、いつかは韓国に戻らなければならない。私にとってこの日本という外国で生活しながらも韓国人として

模範にならなければならないし、どんどん近づいて親しくなる日韓時代に両国の発展に貢献することができるように努力しなければならないと思う。

韓国人は個人の成功が家の誇りであり、他人にも尊敬されることができる。と前々で述べたが、私は個人の成功よりは社会的に尊敬される人になるように努力していきたいと思う。そして、息子のミンホもたくさんの人から尊敬されて、他人を配慮・譲り合い、大切にすることができるようになるように教育していくつもりだ。また、韓国人としてプライドを持って生きていけるように心がける。また、ミンホが20才になったら、迷いなく、軍隊にも行かせるつもりである。これから、日本で生活して行く間、大変な苦難と試練が来る時、その逆境を切り抜け、先を見通せるように、目の前に見えることだけを考えず、遠く見ることもができるように常に余裕を持って生きていきたいと思う。そのように暮らしていけばいつかきつと良い日が来ると確信する。

小沢氏の秘書石川氏が、土地購入に関する支出を一月遅れで記帳したという、犯罪とも呼べない単純ミスで逮捕・拘留された事件、厚生労働省の村木厚子元局長が、障害者団体の便宜をはかったという、まったく事実無根の濡れ衣を着せられて逮捕・拘留された事件、あまりに「常軌を逸した」検察の行動への非難は、九月二日、検察による資料改ざん問題が暴露されてピークに達した。問題行動をおこした本人は、「改ざん」は単なる単純ミス行為にすぎず、法的に何の意味もなかったと主張しているが、この理解不能な行動を起した本人が、数々の濡れ衣を罪もない人々に着せかけた事実を忘れてはならない。法の番人であるべき「検察」がおかしくなっているとしたら、我々は何を信用し、何にたよったらよいか。マスコミはこの際、この問題を徹底的に追求し、禍根をえぐり出してほしい。

ところがそのマスコミがたよりない。この夏、延々と行われた小沢一郎たたきは、かつての吉田茂首相をめぐる報道スタイルに酷似していた。当時マスコミの吉田たたきは殆どヒステリーの域に達していたが、そのマスコミがいまになって吉田氏を「戦後最高の政治家」と持ち上げている。国民の関心的である「政治とカネ」を論じるならば、根拠のとほしい個人攻撃でなく、いったい政治にはどうしてそんなにカネがかかるのか、徹底した調査報道を行ってもらいたい。

もっとも政治家の姿勢もたよりにない。菅首相は就任当時「自民党も一〇%の数字をだしているし」と「消費税一〇%の引き上げ」を口にし、その「軽卒さ」をたたかれて謝罪した。しかし首相の過ちは、「一〇%」の数字を口にしたことではない。

最大の問題は、彼が自民党を引き合いに出して自分の主張を正当化しようとしたことにある。「私ばかりじゃないんですよ、あの人もいってますよ」と他者を引き合いに出して自説を正当化しようとする人……日常的なつきあいにおいてさえ、私たちはそういう人間を信頼するだろうか。

たとえ不人気きわまる政策であろうとも、どうしても実施しなければならぬ政策なら、なすべきなのである。そのとき政治家は、「百万人いえども我行かん」の気概をもってこれに当たってもらいたい。「誰々もいっていることだし」と顧みて他をいう指導者を、国民が信頼するだろうか。国を立て直すガマンが必要ならば、国民はガマンする。何をガマンすべきか、すべきでないのか、それを率直に国民に問ひかけ、実践する政治家こそを、いま私たちは求めている。真の政治家よ、いでよ！

女の政治日誌

—七月から九月まで—

▼「消費税一〇%」発言をした菅内閣の支持率が下がり続け、民主は参院選で敗北。自民が改選議席第一党となり、衆参でねじれ国会に。みんなの党は大躍進。

▼臓器の提供の条件が大幅に緩和された「改正臓器移植法」が施行。これにより本人の書面による意思確認がなくても家族の承諾で臓器提供が可能となった。

▼東京・足立区や杉並区で、戸籍上は生存しているが、住民登録地に住んでいない、又は所在不明という高齢者がみつきり、各自治体が調査を開始。所在不明の一〇〇歳以上の高齢者が続出。

▼世界中で猛暑に。日本各地でも最高気温三五度以上の猛暑が続く。この暑さで野菜が値上がりし、熱中症による死者も。

▼郵便不正事件で、大阪地裁は厚労省の村木厚子元雇用均等・児童家庭局長に無罪判決を言い渡した。検察の強引な捜査が浮き彫りに。さらに九

月半ば、検察による証拠改ざんが暴露され、大問題になりつつある。

▼経営再建中の日本振興銀行が経営破綻し、金融庁は初めてペイオフを発動した。預金は元本一千万円とその利息まで保護される。

▼民主党の代表選は、菅直人首相と小沢元幹事長の一騎打ち。地方票を多く獲得した菅首相が勝利したが、国会議員票は小差だった。大新聞の小沢たたきの執拗さは異常で、週刊誌の批判を受けている。続落の内閣支持率、持ち直す。

▼七月から円高傾向にあったが、九月、ついに一ドル八二円台まで円高ドル安に。日銀が為替介入し、八五円台までもどる。

▼東シナ海の尖閣諸島沖で、中国の漁船と海上保安庁の巡視船が衝突した。漁船の船長を逮捕・拘留していることに中国が強く抗議。船長は釈放されたが問題の根は深い。

(お詫びと訂正・68号の「暮らしの中のマレーシア」の著者名は桜井祐江さんです。ペンネームでなく、本名でとお申し出がありました。お詫びして訂正いたします)